

読書推進運動



公益社団法人
読書推進運動協議会

〒162-0828
東京都新宿区袋町6
日本出版クラブ会館内
TEL 03(3260)3071
FAX 03(5229)1560

発行人 宮本 久
編集人 片岡 伸子

定価60円 会員の購読料は
会費の中に含まれる

No.606

- ★「野間読書推進賞」推薦要項(2頁)
- ★「上野の森 親子ブックフェスタ」開催(4頁)



大人に本のよろこびを

翻訳家
このあの文庫「主宰者」

こみや
ゆう
小宮 由

子どもの読書推進について思うとき、私は「いまの子ども」ということばを使う人の意見を信用しないようにしています。とくにその人が、作家・編集者・批評家などの子どもの本の関係者であればあるほど。

たとえば「いまの子どもは、本を読まなくなつた」とか「いまの子どもは、こんな本(地味だったり、文字量が多かったりする本)は読まない」ということを述べている人は、そもそもだれを指して「いまの子ども」と言っているのでしょうか? きつと具体的なイメージはないはずです。なぜなら日ごろから子どもたちと、深く関わっていれば、その本質は、いまも昔も変わらないと、気づくはずですから。私は、その人たちが使う「い

まの子ども」とは、じつは「いまの大人」という意味ではないかと考えています。「いまの大人は、本を読まなくなつた」「いまの大人は、こんな本は読まない(買わない)」と置き換えると、納得できます。大人が本を読まなければ、たいていの子どもも本を読まないからです。

子どもの読書離れは、いまにはじまつたことではありません。時代の変化などは関係なく、いまも昔も、本を読む子は読まじ、読まない子は読まない。本を読む子の身近には「本はおもしろい」と思う大人がいて、本を読まない子の身近には「本以外のものがおもしろい」と思う大人がいる、それが子どもの読書環境の大きな差ではないでしょうか。

ですから、子どもたちに読書を推進するには、まず大人に本のおもしろさを伝えていかなければなりません。そのためには、大人が本と出会える機会をできるだけ多く作り出す必要があります。

大人が本を楽しんでいる姿を見せることによつて、子どもたちは本が好きになります。子どもにとつて、もつと楽しいことは、大人と同じ本を楽しむことです。身近な大人と、同じ本で、同じよろこびを共有できたら、これほどうれしいことはありません。その経験は、子どもを本好きにさせるだけでなく、人間への信頼感や、自己肯定感を育むことにもなるのです。

ですから、大人には、ぜひ、「おもしろい子どもの本」に

出会つてほしい。では「おもしろい子どもの本」とはなにか。もちろん、その「おもしろい」には、いろいろなバリエーションがあつていいとは思いますが、原点を忘れてはいけないと思います。本来、子どもの本に限らず、本のおもしろさとは、それが「文学」であるということですから。わかりやすさや、かわいらしさ、目新しさや、アイデア勝負などといったものを子どもの本の「おもしろい」にしてしまうと、子どもにとつては逆効果です。それを大人もおもしろがるも、子どもは、本というものが、一過性である映像メディアと等しいものと捉え、文学という芸術世界を知らぬまま、大人になつてしまふでしょうから。

『別世界にて』(みすず書房)という本で、著者のC・S・ルイスは、このようなことを書いています。

「五十歳になつても読む価値があるものでなければ、十歳の時にだつて読む価値はないのです」

第48回(2018年度)

『野間読書推進賞』

受賞候補者推薦のお願い

公益社団法人 読書推進運動協議会は、読書の普及に貢献し、讃えられるべき業績をあげながらも、報われることの少なかった個人および団体を顕彰してまいりました。

この賞は、1969年(昭和44年)、当協議会の社団法人設立を機会に、野間省一 講談社社長(当時)より1000万円の寄付を受け、1971年(昭和46年)に「読書推進賞」を設定、1979年(昭和54年)に講談社創業70周年記念として1000万円、1987年(昭和62年)に講談社創業80周年を記念して2000万円の寄付を受け、その基金を中心にして運営しているものです。「読書推進賞」は、1985年(昭和60年)より、「野間読書推進賞」と改めました。本年度もつきに掲げる要項にしたがって、実施いたします。みなさまからの推薦をよろしくお願ひいたします。



野間読書推進賞賞牌

1 賞

賞状および賞牌

2 副賞

金30万円(団体の部)

金20万円(個人の部)

金5万円(奨励賞)

3 受賞の対象

地域や職域などにおいて、読書の普及に永年力を尽くし、読書推進運動に貢献された個人または団体。業務として読書推進に関する事業に従事する者、また学校図書館関係は除外します。

個人の場合、年齢・職業に、団体の場合、会員数・規模などに制限はありません。

過去に推薦いただいた個人や団体を再度ご推薦くださってもかまいません。

4 推薦方法

- ① 全国都道府県および政令指定都市教育委員会
- ② 都道府県中央図書館および読書推進運動協議会
- ③ 全国市町村教育委員会連合会
- ④ 日本PTA全国協議会
- ⑤ 日本新聞協会
- ⑥ 日本放送協会
- ⑦ 日本民間放送連盟

などに候補者推薦を5月中旬に依頼します。

受賞候補者の心当たりがある方は、これらの団体を通してご推薦ください。

これまでの受賞者一覧、昨年度の受賞者実績は、当協議会ホームページ (<http://www.dokusyo.or.jp>) でご覧いただけます。ご推薦の参考としてください。

5 推薦用紙

当協議会指定の用紙をお使いください。推薦用紙および要項をご入用の際は、当協議会にご請求ください。

6 推薦締切

2018年(平成30年) 7月31日消印有効

7 受賞者決定まで

推薦締切後、8月下旬に15名の野間読書推進賞運営事業委員からなる選考準備委員会が候補者を絞り、9月上旬に3名の選考委員からなる選考委員会で、団体の部、個人の部と、必要が認められた場合は奨励賞の受賞者を決定します。各賞の受賞者は、原則として2団体(2名)以内とします。

8 選考委員

- 笠原良郎 公益社団法人全国学校図書館協議会 顧問
- 小峰紀雄 株式会社
- 小峰書店 社長
- 酒川玲子 公益社団法人 日本図書館協会 参与



昨年度受賞者、推薦者のみなさんと野間会長、選考委員

■2018年度 定時総会開催のお知らせ

- 一、日時 2018年6月19日(火) 午後3時~4時30分 日本出版クラブ会館 (東京都新宿区袋町6) 03-32267-6111
- 一、場所
- 一、議事・第1号議案 平成29年度事業報告書と決算報告書承認の件
- ・第2号議案 役員交代承認の件
- ・第3号議案 事務所移転および定款一部変更承認の件

*5月中旬に議案書(2018年度年次報告書)と出欠ハガキをお送りします。ハガキのご返信と当日のご参加を、よろしくお願ひ申し上げます。

9 結果の通知

受賞者決定後、受賞者とその推薦団体へ、すみやかに通知します。また、すべての推薦団体に、選考結果を文書にてお知らせします。

10 贈呈式

2018年(平成30年)11月6日 日本出版クラブ会館にて 出版界、および図書館界の関係者(団体)、これまでの野間読書推進賞受賞者、「読書推進運動」執筆者のみなさんなどが出席されます。昨年の贈呈式の様子を、当協議会ホームページに掲載しておりますので、ご参照ください。

■2018年度「絵本ワールド」開催予定

今年も「子どもの本のおまつり」が各地で開催！

「子どもの読書活動推進会議」が推進する「絵本ワールド」は

2000年の「子ども読書年」から

全国で開催されている子どもの

本のおまつり。開催地域の県立図

書館・地元読書グループ・ボラン

ティア・地元新聞社などが中心に

なった実行委員会により、児童文

学作家・絵本作家による講演や

トークショー、開催地域の読書グ

ループ・ボランティアによるさま

ざまなワークショップ、1万点を

超える子どもの本の展示即売会な

どが行われる。今年の開催地は以

下のとおり。



ライブイベント後の記念写真 (2017年度 わかやま)

【開催決定】

第19回絵本ギャラリーin奈良

7月28日(土)・29日(日)

奈良県奈良市 ならまちセンター

絵本ワールドinふくしま2018

8月11日(土)・12日(日)

福島県郡山市 ビッグパレットふ

くしま

絵本ワールドinいがた2018

11月18日(日)

新潟県新潟市 朱鷺メッセ

【開催予定】

絵本ワールドinわかやま2018

11月10日(土)・11日(日)

和歌山県有田郡 有田川町地域交

流センターAIEC

地域の図書館と行政が中心と

なって運営する和歌山では昨年、

9名の絵本作家による会場ガラス

壁面や旧有田川鉄道御霊駅の駅舎

へのライブイベントのほか、地元の

人気飲食店や小物ショップのテン

トが並ぶ市場も同時開催された。

また、2020年の開催をめざ

している城西国際大学東金キャン

パス(千葉県)では、昨年につづき

今年もプレ大会が開かれる予定。

■「子ども読書の日」を記念するフォーラム

読書推進活動のヒントに あふれた事例発表！

4月23日(月)、東京都渋谷区国立

立オリンピック記念青少年総合セ

ンターで「平成30年度『子ども読

書の日』記念『子ども読書推進

フォーラム(主催『文部科学省・

国立青少年教育振興機構』が開

催された。今年度、文部科学大臣

表彰を受けた子どもの読書活動優

秀実践校は136校、図書館は47館

団体(個人)は53。

特別講演は、絵本作家とよた

かずひこさんの「小さな人たちに

の応援歌」。「いつも子どもたちと

やっていることを交えて、作品づ

くりの背景を紹介します」と、自

作の紙芝居、絵本の読み聞かせを

しながらの講演となった。

自身は絵本の読み聞かせを受

け体験がなく、子どもの本に興味

がなかったけれど、子育て期間に

子どもが持ち帰る絵本ではじめて

子どもの本と、長く読み続けられ

る絵本の力を知ったというとよた

さん。お子さんとの日常のひとこ

まや近隣の子どもの交流などを

「自分に取り入れて咀嚼して、作品

にすることをくり返してきました

」子どもは同じ本を何度も読ん

でもらいたがります。そんな本を

作れるかがぼくの宿題」と語った。

各部門の受賞者代表4施設・団

体による事例発表と対談は、「これ

からの読書活動に期待すること」

をテーマに、東京大学大学院教授

秋田喜代美さんのコーディネート

で進行。埼玉県羽生市立羽生南小

学校は、家読・家族との読書郵便

など家庭と連携した読書活動や、

ビブリオバトルの様子などを紹介

した。

長野県茅野市立北部中学校は、

茅野市の公民協働による読書推進



多彩な活動が報告された事例発表・対談

における学校での読書教育の位置

づけを紹介し、生徒たちの読書意

欲や調べ学習の質的向上につな

がっていると報告した。

年々人口が増えている地域にあ

る神奈川県横浜市鶴見図書館は、

図書館でのおはなし会、保育園や

乳幼児健診へ出張しての活動に力

を入れてきたことや、協力スタッ

フ養成の取り組みも紹介した。ま

た、地域に住む外国籍の子どもた

ちへの支援についても述べた。

個人で受賞した、山梨県の原康

徳さんは、所属する山梨子どもの

本研究会の活動を説明したあと、

自身がとくに力を入れてきた科学

あそびを取り入れた科学読みもの

の読み聞かせを紹介。「五感を育

て、生命の尊さを知る、それがで

きるの科学読みもの」と述べた。

5月3日～5日 「上野の森 親子ブックフェスタ 2018」 多くの来場者で大盛況！



5月3日(例)～5日(例)に東京都台東区の上野恩賜公園などで、「上野の森 親子ブックフェスタ 2018」(主催)子ども読書推進会議/日本児童図書出版協会/出版文化産業振興財団)が開催されました。

心配された天気も、3日の開始前には雨が上がり、風が強いながらも、昨年に続き晴天の下でのフェスティバルとなりました。

メインとなる、中央噴水池広場での「子どもブックフェスティバル」は、出版社などがテントで絵本や児童書6万冊を読者謝恩価格で販売。会場のあちこちで、本を手取る子どもと大人の笑顔があふれていました。各テントでは著者のサイン会、おはなし会なども随時行われました。



【上】本を選ぶ親子、お孫さんへのプレゼントを探す人、図書館・学校図書館の選書の手がかりを求める人……。多くの人でにぎわいました。
【中】目の前で描かれるイラストとサインする手元。注目(さ・え・ら書房テントにて)。
【下】日本児童出版美術家連盟(童美連)は、おそろいのTシャツで参加し「絵本・児童書画家があなたを描きます」を実施。日本児童文学者協会、日本児童文芸家協会も、作家によるおはなし会、サインセールなどを開催しました。

今年、上野動物園のパンダシヤンシヤンがまもなく1歳を迎えることを記念し、各出版社のパンダ関連図書を集めた「パンダの本」コーナーも登場。動物園帰りのパンダのぬいぐるみを持った子どもたちも、多く訪れました。日本図書普及の協力で図書カードが

買つた人対象)も大好評でした。東京都美術館での講演会は、3日「ピブリオバトル&トーク 児童文学作家五人のおすすめ本」(赤羽じゅんこさん、松本聡美さん、おおぎやなぎちかさん、森川成美さん、濱野京子さん)、「元氣は自

分で作れる！からだの元氣大作戦！〜光・暗闇・外遊びのすすめ〜(野井真吾さん)、4日「絵本と音楽とマジック〜子どもが輝く参加型絵本の世界〜」(大友剛さん)、「描場(KAKIBA) in 上野の森」(黒田征太郎さん)、5日「光文社古典新訳文庫全7巻完結記念『ナルニア国物語』の魅力語りあう」(土屋京子さん、金原瑞人さん)。国立国会図書館国際子ども図書館では5日に「赤い鳥」創刊100年記念記念講演会『赤い鳥』を学ぶ(共催)国立国会図書館国際子ども図書館」(関口安義さん、遠山光嗣さん)が開かれました。いずれも多くの参加者を集め、講師のなかには講演会後にフェスティバル会場でサイン会やおはなし会をする方もいました。

【上丸】ひときわ目立つ帽子で読み聞かせをするサトシンさん。
【上】主催者代表と来賓、地元の子どものためのテークアウトで開会！
【中】フェスタ恒例「講談社 本で遊ぼう 全国訪問おはなし隊」のおはなし会。絵本の近くで寄ってくる子どももいました。
【下】写真集、物語、図鑑……いろいろなパンダの本を集めたコーナー。道ゆく人から「あ、パンダ！」の声も。



【上丸】ひときわ目立つ帽子で読み聞かせをするサトシンさん。
【上】主催者代表と来賓、地元の子どものためのテークアウトで開会！
【中】フェスタ恒例「講談社 本で遊ぼう 全国訪問おはなし隊」のおはなし会。絵本の近くで寄ってくる子どももいました。
【下】写真集、物語、図鑑……いろいろなパンダの本を集めたコーナー。道ゆく人から「あ、パンダ！」の声も。

【上丸】ひときわ目立つ帽子で読み聞かせをするサトシンさん。
【上】主催者代表と来賓、地元の子どものためのテークアウトで開会！
【中】フェスタ恒例「講談社 本で遊ぼう 全国訪問おはなし隊」のおはなし会。絵本の近くで寄ってくる子どももいました。
【下】写真集、物語、図鑑……いろいろなパンダの本を集めたコーナー。道ゆく人から「あ、パンダ！」の声も。

■石井桃子生誕110年記念&「かつら文庫」60周年

「子どもと本を一つとこころにおいて」みた60年をふり返る

東京子ども図書館理事 張替 恵子

東京子ども図書館は1974年に都内4つの家庭文庫が合流してできた私立図書館だ。母体となった文庫のひとつ「かつら文庫」は、作家・翻訳家・編集者として知られる石井桃子さん(1907~2008年)が「子どもと本を一つとこころにおいて、そこにおこるじつさいの結果を見てみたい」という動機から1958年に自宅に開設、今年3月1日に60周年を迎えた。これを記念して、「かつら文庫ギャラリートーク」「朗読とお話の会」「池田正孝氏スライド



かつら文庫での石井桃子さんの読み聞かせ

今年2月、3月には、ふたつの講演会を催した。2月16日に当館ホールで行った記念講演会では、天理市立図書館の高橋樹一郎さんに、「小さな図書館がもたらした大きなこと」という題で日本の文庫活動についてお話しいただいた。高橋さんは、2001年~2004年に、当館が伊藤忠記念財団と共同で行った「子どもBU NKOプロジェクト」の担当者として、松岡享子名誉理事長とともに、全国90か所の文庫を訪ねてまわった。その後の文献調査などもあわせて、明治以降の文庫の歴史を概観。子どもに本を手渡そうとした民間人が日本の津々浦々にいたこと、1970年代以降、公共図書館設置運動の牽引役にもなったことなど、文庫が果たしてきた役割をたどった。この研究成果は出版に向けて準備中とのことなので、ご注目願いたい。

3月4日の講演会は杉並区立中央図書館視聴覚ホールにて同館との共催で行われた。講師は、フリーの映像作家で、当館の広報ビデオを製作した森英男さん。ここ数年は、石井桃子さんのドキュメンタリーに専念されてきた。昨夏完成した3巻組DVDの最終巻「子どもに本を——石井桃子の挑戦Ⅲ「かつら文庫」(DODD企画)」の上映のあと、映画製作を通じて得た収穫などを語ってくれた。石井さんが通ってくる子どもたちに向きあうことで、どのような発見をしたか、子どもの反応をどう本作りに生かしたか。関係者の証言を交えて、生き生きと再現された。

さて、例年、かつら文庫のお雛さまを飾る季節には、石井さんの書斎や展示室をご覧いただく公開日を多めに設けている。お雛さまは、山田國廣作の奈良の一刀彫。もともと、昨年亡くなられた評論家・犬養道子さんのものだったが、かつら文庫がはじまったときに道子さんのお母さまの計らいで贈られたという。石井さんは、このお雛さまをモデルに『三月ひなのつき』という作品を書いている。2月22日には、その全編をお聴きいただく朗読会も開かれた。母とふ

たりで暮らすよし子は雛人形をほしがるが、母は、空襲で失った自分のお雛さまが忘れられず、既製品を買う気になれない。母子の心の動きをこまやかに描き、ていねいに作られたものの美しさと値打ちを静かに語りかける本作の魅力が、声のにせることでさらに際立ったように思う。

子どもたちとの記念行事も行った。かつら文庫は現在、東京子ども図書館の分室として運営されているので、当館の児童室とは姉妹図書館の間柄だ。そこで、双方に通う子どもたちが交流する「きねんえんそく」を企画した。まずは、3月17日、児童室の子どもたちが中野から荻窪へバスと電車を乗り継いで、かつら文庫を訪ねた。一緒にいるおはなしを聞いた後、石井さんの書斎や展示室などをめぐり見学もした。みんな、驚くほど真剣に案内に耳を傾け、石井さんがた

くさんの付箋を貼った翻訳書や古いアルバムに見入っていた。この日は、足の遠のいていた、文庫の元・常連も顔を見せ、集合写真を撮った。連休中の5月5日には、かつら文庫の子どもたちが東京子ども図書館に来ることになった。没後10年、この間にも、石井さ



いまの常連さん、昔の常連さんがそろって60周年をお祝い!

んが手がけた児童書の増刷は重ねられている。新たなエッセイ集や評伝の刊行、テレビ化などもあった。今年7月21日~9月24日には県立神奈川近代文学館で「石井桃子展」が予定されている。一般に、文学記念館は時を経るにつれ忘れ去られがちだが、かつら文庫へのお客さまはまだまだ続きそう。来館の記念になるよう、石井さんの生涯を写真でたどるフォト・リーフレットや、アメリカの絵本作家V・L・バートンさんが1964年の来日時に描いてくれた絵のポストカードやバッジも製作した。現在は、石井さんの著作を新聞・雑誌記事なども含めて網羅する石井桃子著作目録の完成に向け、緻密な作業が続いているところだ。

優良読書グループの歩み (5)

2017年度の「読書週間」に際して道府県読書推進運動協議会より推薦され、本会において表彰した全国の優良読書グループの活動報告を掲載いたします。
(順不同)

仙台市図書館ブックトークボランティア「ランプ」

代表者 堀 多佳子

宮城県仙台市

〈推薦〉

宮城県読書推進運動協議会

「ランプ」は、市民図書館主催のブックトークボランティア養成講座の受講生で構成されています。結成は2010年。会員は現在23名ですが、毎年、養成講座の修了生が数人、仲間に加わっています。「ランプ」という名前には、よい本・おもしろい本を照らしますランプのような存在になりたいという思いがこめられています。

小学校や中学校からの依頼を受け、学校に向きブックトークを行うのが、おもしろい活動です。学校にはシナリオリストをネット配信し、希望のものを選んで毎月1回開く定例会で作ったシナリオを発表し、仙台市図書館の職員

とメンバーが、選書、シナリオの流れ、トークの運びなどの観点で評価し、一定の評価基準を超えたもののみが登録されます。現在登録されているシナリオは約80本ほどあります。小学校の低学年・中学年・高学年・中学校など、対象別になっています。

1本のシナリオには3冊から4冊の本が盛りこまれていて、それらの本をひとつのおはなしを聞いているかのように紹介していきます。子どもたちが手に取ることが少ない良書を選んで、熟考して作ったシナリオがたくさんあるのが自慢です。

リクエストが多いのは、並行読書におすすめの本がラインナップされているシナリオです。国語の教科書の単元に即したものやキャリア教育に役立つようなものなどが、とくに人気です。また、最近では低学年からの依頼が多くなっています。低学年のうちから本に親しんでほしいと願う先生方が、読書をはじめるとききっかけになればと

思つてのことのようです。

いずれにしても、私たちのトークに目を輝かせて聞き入り、トーク後、争うように紹介した本を手取る子どもたちを見ると、とてもうれしくなります。

「本、だあい好き！」という子がひとりでも増えるようにこれからがんばって活動していきます。

おはなしの「こぼこ」

代表者 播磨富士子

京都府相楽郡精華町

〈推薦〉

京都府読書推進運動協議会

「おはなしのこぼこ」は、2002年2月に精華町立図書館で開催されたストーリーテリング講座の受講修了者が、講座で学んだことを生かし今後も勉強していくため、3月にグループを結成しました。その後、「おはなしのこぼこ」とグループ名をつけて、図書館や町内の文庫ではじめた会をできるように活動をはじめました。小学校ではおはなし会をしたいという希望を持っていたので、小学校にお願いをし、昼休みの図書室でのおはなし会からはじまり、2006年には、3つの小学校にかかわる

「おおきなかぶ」のように力をあわせて



ことができるようになりました。

それと別に、子育て支援センターからの依頼ではじめた赤ちゃんへの絵本の読み聞かせは、2006年に1年間行つたブックスタートでの読み聞かせの経験が生かされています。2007年には「子どもゆめ基金」の助成金を受けて、「子どもと本をつなぐ研修会」というテーマで講師を招いて、3回の講演会を開きました。たいへん好評でした。

「おはなしのこぼこ」の創設にかかわった代表のもと、活動をはじめたから、最初の5・6年で基盤ができて、2013年にいまの代表となつてからも、図書館・小学校・子育て支援センターでの活動は続

いています。いまでは、支援学校や保育所、介護施設などにも行くようになりました。

月に1回の定例会では、おはなし会の打ちあわせや報告に時間を取られ、本の紹介やおはなしの練習ができないのが実情です。しかし、絵本作家の講演や、おはなし関係の講演があるときは町立図書館はもちろん、他府県の図書館にも出向いて受講し、おはなしの知識や技術の向上に努めています。「メンバー一人ひとりが、できる

ときにできることを」をモットーにして無理をしないのが継続のコツだと思えます。年度のはじめに担当表を配り、みんながいろいろな場所で行ういろんなメンバーと、活動し、おたがいに刺激しあひながら、よいおはなし会ができるよう努力しています。おはなし会のあとでは、「反省会を兼ねたお食事会をしたり、ほかのおはなしグループとの新年交流会もしています。

活動の場を提供してくれる、町立図書館、学校、子育て支援センター、そして私たちの活動に協力してくれる多くの方々に感謝し、もっと仲間を増やして、子どもたちのふれあいを大切に、絵本と子どもたちをつなぐ活動をこれからも続けたいと思います。

成人読書会むつみ会

代表者 原正治 奈良井博子
島根県松江市

〈推薦〉
島根県読書推進運動協議会

成人読書会むつみ会は、松江市民館公民館の学習サークルとして、1997年4月に設立された。現在会員は14名。毎月1回、第4木曜日午前10時〜12時、松江市民館公民館で、グループ読書のために島根県立図書館が準備した本から、毎月1セット(15冊まで)を共通テキストとして借り、みんなで読んでいます。全員が感想を述べ、なにかこの本の中心問題なのか突き止める話し合いが活動の中心だ。

新年度より読んだ本は、小泉八雲『日本警員日記』、志川節子『春はそこまで』、風待ち小路の人々、モブ・ノリオ『介護入門』、唯川恵『100万回の言い訳』、小川洋子『博士の愛した数式』、山崎豊子『約束の海』。

「一人読書」では考えられないさまざまなジャンルの作品。作家との出会いが、われわれの共通テーマである「人間とはなにか?」をより深く考えるきっかけとなり、さらに新しい出会いへと駆りたて

る、いい循環がやっと生まれてきたように思う。しかし、読書会を成功させるためには、「一人読書」の重要性も理解されていなければならぬ。大事にすべきことばは、「人間は一本の草にすぎない。自然の中で一番弱いものだ。だが、それは考える草である。」パスカルの『パンセ』の一節である。人間すべてが死を前にした存在であり、時期の切迫に遠近の差はあれ、つねに「緩和ケア」を必要としている悲しい存在ではなかったか。『パンセ』は、人が死の直前に読むことができる、最後の本の1冊である。

去年より9月には東出雲中学校3年生2人が、社会体験学習の一環として読書会に参加している。世



中学生の参加が、読書会の可能性を広げる

代を超えた交流が簡単に可能となるのも、読書会ならではのメリットだ。今後は、子どもたちを対象とした本の読み語りや影絵劇の上演、老健施設での詩の朗読など、本を読む楽しさ、ことばによって紡ぎ出される世界の美しさをもっと積極的に伝えていきたい。

最後に、私たちの活動を支えてくれる島根県立図書館、松江市民館、東出雲図書館、松江市民館に心から感謝申しあげたい。

読み聞かせグループ どんぐり

代表者 野田 時枝
大分県由布市

〈推薦〉
大分県読書推進運動協議会

2000年、由布市立図書館の移転にともない、図書館ボランティアの募集があり発足。開館に向けての配架作業を手伝い、元保育士・教師が中心になり試行錯誤をしながらのスタートでした。

はじめて子どもたちの前で読み聞かせをしたときは、緊張している私たちを楽しそうに輝く子どもたちの笑顔が迎えてくれ、味わったことのない幸せな気持ちになったことをいまでも覚えていきます。



子どもたちが絵本の世界を楽しんでいる様子

その後、講習会への参加、研修旅行やほかの図書館の方やボランティアグループとの交流会などを重ね、月に一度の定例会、年一度の総会を継続しています。

年間行事として春のこどもの読書週間に「どんぐりのおはなしかい」、夏休みに「どんぐりまつり」、秋に由布市出身で1946年に日本童話会を設立した童謡・児童文学作家の後藤檜根を顕彰するならぬつ子まつりで「おはなしのへや」をパネルシアター、エプロンシアターや腹話術、手遊びなども交えて行い、たくさんの子どもたちに出会う機会にも恵まれています。

いまでは読み聞かせに対する家庭や地域での理解も深まり、徐々に

に依頼も増え、小学校での朝読書、幼稚園、地区の子育て支援施設障がいのある子どもたちの施設、図書館内の定例おはなし会をさせてもらえるまでになりました。

また、おはなしキャラバン隊と称して要請をいただいたところに出向き、活動の場を広げています。

読み聞かせのほかにも、館内の絵本のあるところや各おはなしまつり、子育て支援施設での壁面飾りも手作りしています。子どもたちの五感を違った角度から刺激し、楽しい絵本の世界へ少しでも導ければと願ひ、行っています。

2016年には図書館通帳の導入があり、市内廃校の小学校をアトリエに活躍する、絵本『だいたいおのいかのいかたろう』の作者で男女二人組の画家ザ・キャビンカンパニーに表紙の絵を依頼、仕あがった通帳を手本を借りる子どもたちの姿は格別です。

今日までこられたのはグループのすばらしい仲間はもちろん、関わってくださったすべての方々と、子どもたちの笑顔とことばのプレゼントがあったからと感謝しています。未来を担う子どもたちと絵本の世界との出会いのために、これからもこの表彰を励みに誠実に楽しく活動していきます。

国際子ども図書館を考える全国連絡会 終文

23年間の活動を総括した要望書を国際子ども図書館へ提出

国際子ども図書館を考える全国連絡会は、国立国会図書館国際子ども図書館の新館完成など、施設・資料の整備にひと区切りがついたことなどから、2018年3月末で23年間の活動を終了した。

終了にあたり、同会は3月28日に国会図書館・国際子ども図書館へ要望書「国際子ども図書館の明日へ望むこと―新たな取り組みの始まりに期待します―」を提

出し、「子ども図書館」としての職員専門性と人材育成への希望、原稿・スケッチ・メモ・書簡など児童図書原資料を収集・保存する機関の必要性、民間の子ども文庫、子ども図書館への支援と連携の提案、よりいっそうの学校図書館支援などを求めた。

3月16日には、終会記念「終わりに際してみんなでこれからを語り合う会」を国際子ども図書館研



記念ティーパーティーでは、会場のあちこちで記念撮影も

修室を借りて開催。会としての組織的な活動は停止するが、今後とも会員それぞれの立場で国際子ども図書館を見守り、支援していくとして、会をしめくくった。

生きる力を育てる読書、その「場」の提供を!

文字・活字文化推進機構 創立10周年記念特別講演会

3月28日(水)、東京都千代田区のみやうり大手町ホールで、公益財団法人文字・活字文化推進機構の創立10周年記念特別講演会が開

催され、建築家で東京大学名誉教授の安藤忠雄さんが「あしたへの挑戦―われわれはどこへ向かうのか」と題して講演した。

文字・活字文化推進機構は、日本語を深く理解し、表現力や思考力、情報分析力や構想力を持った

人づくりと、言語力豊かで創造的な社会をめざして設立された。

文字・活字文化推進機構は『子どもの読書活動推進法』にもとづき、読書を通して心豊かな子どもを育てる「読育」充実のための支援活動を推進している。安藤さんは建築家の立場から、子どもが本に親しむ「場」の提供こそが大切とし、大阪市中之島に自らの設計による文化施設「こども本の森



子どもが本と親しむ場所の重要性を説く安藤忠雄さん

中之島」を建設し、市へ寄付する計画を進めている。その原動力となるのは、「読書は生きていく力のある子どもを育てる」という信念からと語った。

事務局報告(4月)

編集部&事務局のひとこと

- ☆4日 荒井良一さんに第60回こどもの読書週間ポスター原画を返却、次年度以降について打ちあわせ
- ☆5日 朝日税理士法人に「平成29年度収支決算書」の作成を依頼
- ☆5日 機関紙「読書推進運動」(605号)別冊付録「読書週間行事報告」一覧入稿
- ☆6日 機関紙「読書推進運動」(605号)本紙入稿、別冊付録
- ☆6日 国立国会図書館国際子ども図書館と「上野の森親子ブックフェスタ」ほかについて打ちあわせ
- ☆9日 機関紙「読書推進運動」(605号)本紙校了
- ☆9日 「国際子ども図書館連絡会」について河村建夫事務所と打ちあわせ
- ・11日 「上野の森親子ブックフェスタ」運営委員会 出席
- ☆11日 「大震災出版対策本部運営委員会」出席
- ☆12日 「子ども文庫助成」について伊藤忠記念財団と打ちあわせ
- ☆13日 機関紙「読書推進運動」(605号)本紙・別冊 発行
- ☆17日 竹村和子監事に「平成29年度収支決算書」の監査を依頼。その後、西村俊男監事、佐藤潤一監事に順次監査を依頼
- ☆19日 内閣府への平成29年度事業報告について講談社社長室と打ちあわせ
- ☆23日 5月11日 「第60回 こどもの読書週間」
- ・23日 「子どもの読書活動推進フォーラム」出席
- ☆24日 「2018年度 第1回 常務理事会」を開催。出席6名、欠席3名
- 平成29年度事業報告書案と平成29年度収支決算書を審議 承認
- ・26日 「上野の森親子ブックフェスタ」運営委員会 出席
- ☆26日 「2018年度 年次報告書」入稿
- ☆27日 平成29年度 事業報告について内閣府と打ちあわせ

●いつもは取材する側として参加する「上野の森親子ブックフェスタ」ですが、今年はお「パンダの本」コーナーの店番をおおせつかりました。目の前にずらつと並んだパンダ本、なかなかの壮観です。タイトルによつては、各出版社のテントよりもパンダコーナーの方が売れ行きがよいものもあり、「追加で置いてください」とお持ち込みいただくこともありました。

●「1歳の孫に読み聞かせたいんだけど、どれがいいかしら？」と質問するおばあちゃん、次々と本をほしがる娘に「頼むから、どれか1冊にして。これ以上買おうと、お母さんに怒られる」と喚く(?)お父さん。「これ、調べ学習にいいわね」「この本、ハードカバーで出ていなかったかしら?」「このサイズでシリーズになっていると、入れやすいわね」と一冊一冊をていねいに見て、タイトルなどをメモしていく人も、おそらく、学校図書館の方が選書の参考にしていたのでしよう。いろいろなお客さんが来ました。とはいえ、本を手に取りながら購入に至らなかつた人の方がずつと多く、書店の苦勞を感じる一日ともなりました。

●3日間のフェスタはあくまでおまつりで、本と出会うきっかけです。お孫さんに読み聞かせをしたいというおばあちゃんも、次々と本をほしがらるお嬢さんも、この日に買った本だけで満足しないはず。新しい本が必要となったときには、地元の書店でワクワクしながら、本を選んでほしいと思います。(伸)